

随筆

「独断」 エイサーはエイトビートだ！

(有) 麻建築設備設計
渡嘉敷 栄 敏

8月の夕暮れになると、どこからともなくリズムカルな音が涼風に乗って大小聴こえてくる。一区切り終え、スタッフが帰宅し空とした部屋で、机の上の整理をしていたら、香ばしい香りとピアノの音がかすかに下の店から洩れてきた、砂糖たっぷり入った熱いコーヒーで空腹を満たし、ソファーに探ふかと座った、窓ガラスに赤色の灯が陽炎の様に映った、窓の傍らに近寄り、ざわめいた外の様子を見た、白いタスキ掛で勇ましい姿、活動的な動き、心地良いリズムの、道ジュネーがパトカーの先導で始まっている。

那覇ではめったに見ない様子に驚き感動を覚えた。道ジュネーが川沿いの街角を曲り、太鼓やパーランクーの音が遠く聴こえなくなると手に持ったカップを爪で叩き一人道ジュネーの余音を奏でていた。

民謡や琉球音楽にまったくと言うほど興味がなく、ビートルズやC. C. R、又古いBigバンド（ベルト・ケンブフェルト、マックス・グレーガー、ピリーボーン）、の音楽が好きでよく聴いていた。

ある時、幼馴染の友人と沖縄市ゴヤの十字路でエイサーを見た、三線や大太鼓の音と一糸乱れぬ踊に身震いし、飲みかけの缶コーラを握り棒立ちにをった、しばらく呆然と聞いている途中、フト意外なことに気がついた。それはエイサーが「8ビート」のリズムに聞こえたことに、密かな感動を覚えたからである。1950年代アメリカでプレスリーがロックンロール（8ビート）のリズムで世界の若い人らを魅了し電気ショックをあたえた、そのリズム「8ビート」が、なんとプレスリーが生まれる、づー……と、前から琉球音楽に「8ビート」が奏でられていたことに驚き、又沖縄芝居はイタリアのオペラであると新聞記事で見たことでチャンプルー文化いや沖縄音楽の凄さ感じたのである。本土には無かったリズムと、西洋の音階とは異なる、レ#、とら#、が無い琉球音階が人間の癒しや、希望、喜び、を奏でる旋律に成るのではないかと思ったのである。数十年前アメリカンポップスにあきた、日本の若い優秀な多くの音楽家らが、旋律、リズム、和音（ハーモニー）に飢え、新しい音楽を探しに世界中に出た、（今でもそれは起きている）その内の一人「Y・M・O」のメンバー細野晴臣氏がイギリスで友人から喜納昌吉の「ハイサイおじさん」を聞かされたとき、すごい衝撃を受けたと云う、あれ以来、彼は日本に帰る新しい音楽を見出そうと活動している。アジア的な静けさがある琉球音階にラテン的なリズムがある琉球音楽に、興味を持った日本の若い音楽家、彼らが作り出す音楽に琉球を意識したものが少なくはない。僕は小さな感動を覚えたあの日以来琉球民謡が好きになり二、三曲は歌える様になったが、友人が言うにはまだ、リズム音痴は治ってない様だ？

激しく大太鼓を叩く若い白人、パーランクーを天高く上げ叩く黒人、路地の傍らからただ見ている小柄で褐色な俺、チャンプルーなゴザの道ジュネーを思い出す。



 一般社団法人 沖縄県設備設計事務所協会